

私の年賀状

十年ほど前から、私は年賀状の文面に、その時点で自分が感じていることを、エッセイのようなコラムにして出していました。正月早々、ずいぶん長い文言かも知れませんが、私は逆に、誰でもが時間があるこんな時にこそ、ゆっくり読んでいただければよいと思うからです。というのも、一般には、仮に百枚の年賀状が届いたとしても、単なる新年の挨拶だけだと、一枚を数秒で読んでしまい、百枚でも十分もかからずに読み終わってしまいます。忙しい社会ながら、せめて心にも時間にもゆとりのある正月には、こちらのメッセージを伝え、また楽しんでいただければとの思いからなのです。（見出しはこのページのためにつけたものです。賀状では、その人に合わせた文言を添えて）

壮大なる初夢を

（平成九年）

「自分で自分をほめたい」。オリンピックの表彰台に立った有森裕子さんの名文句が、昨年 of 日本新語・流行語大賞に選ばれた。彼女がテレビでおなじみの、大きな目、白い歯を輝かせて振り返った▼「自分の努力を無駄にしたいかと思っただ。かかわってくれた人の努力を無駄にしたいかと思っただ。まだ十年は頑張りたい」。この話がまた波紋を呼んで、各紙で「自分をほめられる一年だったかな？」などの企画も目についた。大切なことは、目標を、希望を、夢を掲げることだ。夢こそ人生を、社会を聞いていく力である▼アトラクタ出身の公民権運動の指導者マーチン・ルーサー・キング博士は訴えた。「私には夢がある。いつの日か、ジョージアの赤い丘の上で、かつての奴隷の息子と、かつての奴隷の所有者の息子が兄弟のテーブルに一緒に座る、という夢が」。夢は今、見事に開いている▼理想は自分で生み出し心のうちに育てるもの。志が人を創る。身近な個人の夢でも良い。二十一世紀に架ける——そんな壮大な初夢を見たいものだ。



成人よ大志を抱け！

(平成十年)

地球の二十四時——東天に昇る太陽は、時間をずらしながら世界くまなく新年の光を送る。正月の祝い方もお困柄を反映。年末に休暇のあるアメリカでは、元旦のみが休みで、二日から仕事も学校も始まる▼中南米の国々では、爆竹や花火を鳴らす。日本の新年の街の静けさは、年賀状の一斉配達とともに、独特の正月文化だろう。もっとも最近では、スーパーやデパートが開業、かつての落ち着きがなくなり、さびしい思いもする▼賀状には「今年こそ」との心意気や夢を綴ったものも多い。夢は自分で生み出し育てるもの。できれば大きいほうが良い。夢や理想の持ち方によって、生き方も変わってくる。小さな目標は、努力や挑戦の歩幅も小さくする。夢が、志が人を創る▼いつの頃からか「志」が日本人の心から薄れてしまった。「少年よ大志を抱け！」——子供たちと大人社会の世相を見るにつけ、あのクラーク博士の呼びかけを、現在によみがえらせたいたい思いがする。

希望と元気を周囲に伝染

(平成十一年)

年は明けたが先が見えない。政治は混沌。経済も低迷。社会全体に元気がない。この長いトンネルの闇からどう抜け出せるのか▼こんな時代状況の中で、上杉鷹山が少なからぬ注目を集めている。極度の財政窮乏となった米沢藩をどう再建するか——鷹山は、藩政改革を次々と断行。まず、古いしきたりを破ることから始まった▼老練な家臣からの執拗な抵抗もあったが、彼の真骨頂は、旧来の侍の権威を否定し、自らが範を示したことだ。「藩主のために領民があるのではなく、領民のために藩主がある」と領民を大切にしたり▼歴史に残る革命は、民衆の心の中に「希望の灯」を燃やすことから始まっている。一人を大切にすればそこから力が出る。努力を最大限に評価し、賞賛と激励を送っていく。人はそれで元気づけられ更になげられる▼なぜか日本語に「悪口」はっても「良口」はない。「病気をうつす」とは言うが「元気をうつす」とは言わない。よっしゃ、今年は希望と元気を周囲に伝染させていく一人でありたい。



「人間革命」が二十一世紀のキーワード (平成十二年)

二〇〇〇年の夜明けを告げる太陽が昇った。ケアムから日本、そしてアジア、ヨーロッパ、アフリカへ。更に大西洋を越えアメリカ大陸、太平洋のハワイから日付変更線へと地球を一周▼ミレニアム——灰色で先が見えなかった九〇年代に区切りをつけると、青空の向こうに明るいま来が開け、なんとなく自分にも飛躍の舞台が待っているように思えてくる▼変化とスピードの時代である。昨年末、わが国の固定電話が五千六百万台に対し、携帯電話は五千七百万台を超え逆転した。電話が開通してから百年余りの歴史を、携帯が十年そこそこ超えたわけだ▼進化論からみて、人類の歴史はおよそ五万年だが、二千年ほどの間に、人間そのものが進化したとは考えられない。変わったのは、人間が作り出した環境であり、人間自身ではない▼アメリカの世界的経済学者サロー博士は、今を「第三次産業革命」と位置づけている。国家経済からグローバル経済へ。富の源泉は、土地や石油ではなく、知識と知恵である、と▼技術や社会の革新が進めば進むほど、人間の生き方を説く哲学や宗教が大切になってくる。「人間革命」が二十一世紀のキーワードなのである▼さあ、新時代の到来に、大いなる希望と夢を——。「志が人を創る。大きな志は大きな人生を創る」

やってきた新世紀に乾杯！

(平成十三年)

年が変わり、新しい世紀がやってきた。でも、元日の太陽も自然の運行も、地球の誕生以来、ずっと同じリズムだろう▼変わったのは科学文明と社会機構。とりわけ、して革命の一年は、これまでの十年分の変化をもたらすかもしれない▼明けても暮れてもケイタイ、ケイタイ——。日進月歩どころか、秒進分歩の感さえある。便利にはなったが、自分の静かな世界に侵れる時がない▼スーパー、百貨店の正月開店。これまで、三が日といえげ、寝坊をし、おせちを囲み、コタツに足を伸ばし、賀状に目を通した。正月の静かな風情。ゆったりと時間が流れていた▼店が開けば、人は仕事に、買い物に駆り出される。休みたいのに休めない。人間の本当の幸せとは何か？進歩とは何か？正月のゆとり時間にまかせて、奈良・平安の時代と比べてみるのも一興▼時間と人間。機会と人間。どちらが主人か——。かくして、ドン・キホーテは見果てぬ夢を追う。「パソコンよりもシエスタ(昼寝)を！」。ともあれ、やってきた新世紀に乾杯！

いよいよ定年留学へ

(平成十四年)

明けましておめでとうございます。

「年を重ね 夢は未来を かけめぐる」

昨年は、三月に定年退職、次の人生の舞台の準備を少しずつ進めてまいりました。八月からは、横田基地内にあるセントラル・テキサス・カレッジの学生となり、本年四月からは、いよいよスペインに定年留学、ドン・キホーテとって「見果てぬ夢」への第一歩を踏み出していきたいと考えております。

皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

平成十五年は年賀状を書いておりません

平成十五年（2003年）は、南スペインの地中海岸・コスタ・デル・ソルに妻と共に居住、私はマラガ大学に通っていました。したがって、いわゆる日本式な年賀状は出しておりません。関係の皆さんには、いかにもスペイン的な絵葉書等をお送りしました。



日本で今後への基盤作りを

（平成十六年）

明けましておめでとうございます。
昨年までのスペインへの「定年留学」も、ここでひとくぎりとすることにしました。
今年は、日本に腰を落ち着け、今後への基盤づくりをしていきたいと思っております。
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



忙しさを楽しむくらいで

(平成十七年)

賀春 皆様には良い年をお迎えのことと存じます。当方、定年五年目、現在は日本でいろいろに手を出しております。

シルバー人材センターの仕事(駅前の自転車整理)、都立高校の国際理解のための教材づくりと英検受験者の指導、NPOで在日外国人の支援活動、月刊誌「日経マスターズ」の通信員、地元シニアクラブのパソコンサークルの幹事と新聞の編集、昭島市の市民大学の学生、男の料理教室等々……。

忙しさを楽しむくらいでいくと、かえって元気が出るような気がします。先日川柳の公開選句で大伴閑人先生にチョッピリほめられました。『空き待てど降りるは隣りまた隣り』(これも良いけど、中と下の句を『電話は隣りまた隣り』として、内閣改造時の時事川柳にすれば良い、なんて)

新年にあわせ、東京のドン・キホーテの近況報告を申し上げます。皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。